
Online Love

舞え！花びらのように！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Online Love

【Nコード】

N7360X

【作者名】

舞え！花びらのように！

【あらすじ】

オンラインゲームの中で出会った二人は、互いに想いを募らせていく……。

Online Game

『一緒に狩りに行きませんか』

そう文字を打って、僕は返事を待つ。

画面の向こうには、いかにも剣士らしい姿の男キャラクターと、女魔法使いっぽいキャラクターの二人が突っ立っており、一見するとシユールな光景になっている。

数秒その様子を眺めていると、魔法使いの方がふきだしを表示させた。漫画のキャラがセリフを言う時のようなアレだ。

『私……ですか？』

『そうです……てか、僕たち以外ここにいませんよ』

『ゴメンナサイ……』

一瞬断られたのかと思ったが、今の謝罪はさっきの僕の発言に対してだったようで、

『ぜ、ぜひお願いします』

すぐ後に返事を返してくれた。

さて、と僕は独り言のように呟き、キーボードを数回叩く。

『って言っても僕も後々待ち合わせしてるんで、それまでの一時間くらいなんすけど……』

『大丈夫です。ぜひお願いします！』

『んじゃ、とりあえず行きますか。君初心者だよな？ レベルもあんまり高くないし』

『はい、二週間前くらいに始めまして……』

そっか、と打った後、僕はマウスを使いマップページを開いた。
しかしレベル7か……僕なら二週間で20はいきそうだけど……っ
ていけない、いけない。相手は普通の人なんだ。

——僕とは違う、普通の人。

……んなこと考えている場合じゃなくて、早く初心者狩りやすい
ポイントを……と、ここでいいか。

『じゃあレイシルクっていう場所に行こう。移動アイテムは持つて
るかな?』

『ひえ……持つてないです、ゴメンナサイ』

『いや謝らないでいいよ。始めたばっかなんだし。それじゃコレ』

『あ、ありがとうございますっ』

アイテムを使うとキャラが一瞬光り、目的地へと移動する。安いエ
フェクトだなあ、なんて考えていると、異変に気づいた。

『桜さん、来ないな……』

桜、というのはさっきの人のキャラネームだ。そして彼女は僕がア
イテムを渡したというのに登場しない。

町の名前は言ったはずだし……仕方ない、もう一度戻るか。

幸い僕はあのアイテムを余るほど持っているため、特に苦でもなか
った。たとえ戻った先にさっきのキャラがいなくても、まあそれは
それで別に、と言った感じだ。

『……あっ!』

と、僕が着いたとたんに文字を表示させたのは桜さん。どうしたんだろうか。

『狩るの、やっぱ嫌でしたか？』

『あ、いえ、そういうことじゃなく……』

『え、ええと……その、アイテムってどう使うだろうなー……みたいな』

どうやら僕が思っていた以上に初心者らしかった。

ふむ、と息をつき、一通り説明をする。アイテムだけでなく基本的なことも含め、だ。

『……ってわけだけど……分かった？』

『はい、ありがとうございますっ。ゴメンナサイ……』

『いいって、いいって。それじゃ行こう』

そう返して、今度こそ出発する。さすがに理解したのか、今回はちゃんと目的地に来てくれた。

『もしかして桜さんって、ゲーム買っても説明書とか飛ばす人？』

『あ……はい』

『あはは、やっぱりそっかー』

『その、ゴメンナサイ。アイテムいっぱい使わせちゃって……』

『別に大丈夫だよ。あれは余裕あるし』

『いえ、いつか必ず返させていただきますっ。ほんとありがとうございますっ』

結構改まった人なんだな。

僕は、それじゃ狩ろう、と打ち、キャラを移動させていく。それに

ついてくるようにして桜さんも動き始めた。

『この辺は弱いけど経験値結構入ってくるからね。最初は僕がサポートするけど、慣れたら一人でやってみて』
『はいっ』

このゲームはシステムの戦い方ではなく、基本敵が出てきたら立ち向かい、仲間がいればそこに加わる感じた。つまりターン制での攻防とかはない。

なので逃げようと思えばいつでも逃げれるし、桜さんはレベル7なのでそうそう死にやしない――

『きやー』

『つてさっそくやられてるうっツ!!』

おいおい勘弁してくれ。相手はレベル3とかだぞ。
とりあえず薬でも使わないと……。

『……よし、これでオツケー』

『ほんとうにゴメンナサイ……!』

『いや、まあ、ちょっと驚いたけど大丈夫さ。それよりも防御するタイミングとか覚えなきゃね。少し見ててよ』

僕が手本を見せ、桜さんが真似る。三十分後には僕が戦闘中に軽くサポートする

だけになり、一時間後には一人でレベル8の敵を倒せるようになっていた。

『やったっ!レベル10っ!』

『おめでと桜さん。だいぶ戦闘にも慣れたね』

『はい、ありがとうございますっ』

よきかなよきかな……っと、そろそろ時間だな。

『それじゃごめん、そろそろ行かないといけないから、僕はこれで
『あ……はい、いろいろとありがとうございますっ』

僕が移動アイテムを使おうとメニューを表示させたところで、桜さんが、あの、と呟いた。

『なに？』

『何で私、誘ってくれたんですか？』

『な、なんでと言われても……』

『よく、私みたいな初心者っぽい人を教えたりしているんですか？』
『いや、そうでもない……』というか、人に教えたのは桜さんが初めてだよ』

なんで……か。そっぴいやなんでだろう。僕こっぴいことするの別に好きでもないし……。

『んーと……運命を感じたから、かな』

『運命？』

うおお、適当に言っただけだが、予想外に気持ち悪かった。

『と、とにかく、時間もあつたからさ。なんとなく、だよ』

『なんとなく……ですか。はい、分かりました』

『……それじゃ』

『あのっ』

何だ？ まだ何かあるのか？

『よ、良かったらというか……もしまた暇があったら……わ、私と一緒に狩りをしてください』

その言葉に対し、僕は見習い魔法使いの方を見ながら、文字をつづっていく。

『時間あつたらカリスギアって町に来て、ランドヨークってギルドを探してみて』

『ぎ、ぎる……？』

『狩りを一緒に行うグループみたいなもん。んで、そのギルドに僕入っているからさ……多分行けば会えるよ、僕いつも暇だし』

そう言つて、先ほど渡したアイテムをもう一つ用意し、相手に差し出す。

『移動するときは、これ使つて』

すると桜さんは、それを受け取り、言つた。

『ありがとございますっ。ナイトさん！』

そして僕はアイテムを使いその場を去つた。

向かう先は……僕が加入しているギルド、『ふぁんとむ』。

『ごめん桜さん、ネットの中では嘘が蔓延しているから気をつけて』

僕は誰もいないマップで、小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7360x/>

Online Love

2011年10月19日19時19分発行